

# あいち生物多様性戦略推進委員会 議事概要

## 1 日時

2020年3月24日(火) 午後1時から午後3時まで

## 2 場所

愛知県三の丸庁舎 地下1階 B101 会議室

## 3 出席委員

<あいち生物多様性戦略推進委員会>

武田<sup>稷</sup>委員長、大東副委員長、福田<sup>秀</sup>副委員長、香坂委員、田中委員、夏原委員、福井委員、増田委員、道家委員、斉藤委員、佐藤委員、柳原委員、松井委員(代理 吉田氏)、酒向委員、武田<sup>淳</sup>委員

## 4 議事概要

### (1) 委員長及び副委員長の選出

(事務局から資料1と資料2について説明)

→委員の互選により、武田<sup>稷</sup>委員を委員長に選出

→武田委員長からの指名により、大東委員及び福田委員を副委員長に選出

### (2) 検討会の設置及び構成員の選出

(事務局から資料3について説明)

#### 【委員】

- ・あいちミティゲーション検討会の人数が少なく見えてしまうのは、生態系ネットワーク形成検討会には各協議会の会長が全員入っているためであり、比較してそう見えてしまうものである。生態系ネットワーク形成検討会では、交付金の審査は協議会の会長以外の方が担うということである。

→資料3のとおり、検討会を設置し構成員を選出した。

### (3) あいち生物多様性戦略2020の進捗状況について

(事務局から資料4について説明)

#### 【委員】

- ・p1の表の数値に間違いがあるため修正をお願いする。表中の括弧書きの数値は何を意味するのか。

#### 【事務局】

- ・括弧書きの数値は2017年度の実績である。

**【委員】**

- ・市町村の地域戦略策定について、今後環境基本計画の改定を控えている市町村があると思われるが、どの程度策定が進むと県は把握しているか。

**【事務局】**

- ・県では市町村での地域戦略策定を進めるためのワークショップを年2回行っている。今後の市町村の策定予定については調査中であるが、現在5市町村程度が作業中であると認識している。

**【委員】**

- ・地域戦略は単独での策定が難しい自治体が多いため、他計画と合わせて策定できるように働きかけを進めていただきたい。

**【委員】**

- ・取組の振り返りについて、どのようなことが新しい戦略に生かせるのか。それぞれの項目が進展しているということであるが、実際に自然環境がどのように改善されたのか、対策に対する自然側の変化が把握できているのか。例えば、絶滅危惧種の状況とか、生産性を向上させる漁礁の整備が、どのように効果としてでてきたのか教えてほしい。

**【事務局】**

- ・実際にどのように自然の状態が変化しているかを把握することは難しいところである。県では現在レッドデータの改定を進めているが、対象となる希少種は増えてきている。これは主に評価対象を増やしたということや調査が進んだ結果と考えており、従来の希少種の数については、おおむね横ばいであると把握している。あくまで現時点の結果である。

**【委員】**

- ・環境省の次期生物多様性国家戦略研究会に参加しているが、自治体で地域戦略が策定されたことによる効果や、実現できた情報を拾い上げることを進めている。県戦略でもそのような事例を拾い上げていただきたい。緑の基本計画でも生物多様性の視点が含まれるようになってきている。また、防災についての議論も国では活発になっている。Eco-DRR等の新しいインフラについても、防災面と合わせて新しい知見を発信していただきたい。

**【委員】**

- ・12番の数値目標について、これは達成されているということでよいか。

**【事務局】**

- ・達成されていると思われるが、細かい数値は8月の委員会で改めて示させていただきたい。

**(4) 戦略の改定について**

(事務局から資料5と資料6について説明)

**【委員】**

- ・資料 6 についてが今回の最も重要な議事である。さきほど委員から指摘のあったことと関連するが、担当部署が異なる取組にどこまで関与できるかという問題がある。愛知県は比較的に連携がとれていると思うが、数値目標については関連部署と協議のうえで妥当なものを検討していきたい。生物多様性ポテンシャルマップは限られた種で検討したものである。これからは協議会ごとに再検討が必要になってくるが、それぞれの地域に応じた具体的なポテンシャルマップが作られていくのではないかと考えている。各地域には特性があるので、それらを踏まえて検討していく必要がある。生態系ネットワークについては、これまでは各主体の個々の活動であったものを、県土全域のネットワークとしてつなげられるように方針を定めていきたい。活動団体同士の組み合わせも検討事項であり、ユースなど新しい主体との連携を全体で実施して行くことも大きな課題である。この議事については全ての委員からご意見をいただきたい。

**【委員】**

- ・森林が増えているのはどの表を見ればよいのか。

**【事務局】**

- ・森林景観域の変化状況から把握している。

**【委員】**

- ・知多半島で同様の把握を行っているが森林は実際に増えている。これは耕作地の放棄が原因である。愛知県では分断されている森林をつないでいく取組が重要であるため、そのようなことを把握できる解析が必要である。また、地域への展開についてであるが、なぜこの 3 地域の区分なのか理由があれば教えていただきたい。

**【事務局】**

- ・県土を 3 つに分割して全域を網羅するという考えである。

**【委員】**

- ・地域循環共生圏を環境省はローカルな SDGs の取組として進めているが、地域に限らない横断的な大きな循環も重要である。どう循環するのかという視点が必要であろう。森林資源については、森林環境譲与税等主として基礎自治体が関わる部分であるが、県として生態系サービスの側面から森林管理に言及していくことも重要ではないかと考える。行動計画には担当部局を明記することも効果的な方法である。国の戦略は閣議決定であるため、省庁横断的に進む予定である。

**【委員】**

- ・4 つコメントする。SDGs に絡めて進めていくということであるが、SDGs は開発行為に対してどうしていくかということが元々の出発点であった。最近では SDGs について開発のことが直接出てこないようになった。発端である持続可能な開発に関する目標であることを意識する必要がある、これはあいちミティゲーションとも結びつく内容である。2 つ目であるが、これまでの生態系ネットワーク検討会は、どこにどんなネットワークを形成していくのかを明確にしていくことが大きな役割であった。また、あいちミティゲーション検討会は、それをど

のように進めていくのかの検討を進める場である。どちらも関連する内容の検討があるため、役割が不明確であると思われる。これら2つは明確な関係性を持って進めることが重要である。3つ目について、県単位でネットワークを示すことも重要であるが、9つの協議会単位でのネットワークの検討も重要である。県土全体のスケールと、協議体単位のスケールでネットワークを検討して、関連性を整理することも重要である。4つ目について、自然地の変化は多くの評価項目があるが、県民の意識は1つの項目しかない。今の日本で最も重要なのは意識の部分である。県民の生物多様性についての認識度合いの向上に力を入れないと変わっていかないのではないのか。

#### 【委員】

- ・愛知県から生態系ネットワークの話聞いた当初は、先進的な取り組みをしていると感じた。しかし、そこから進展が少ないようであるので、生態系ネットワークやポテンシャルマップといった情報の有効活用について検討することが重要である。土地には所有者の権利が問題としてあるため、いかに違う場所で代償できるかが重要である。防災に関することも、関連して地図に盛り込む必要がある。エシカル消費の視点も重要である。行動計画に含めてもよいのではないだろうか。

#### 【委員】

- ・GISの情報が整理されているが、それぞれの政策と結びついた検討が必要になると考える。生態系ネットワーク協議会の9地域があるので、県はわかりやすい地図情報やデータベースを地域や県民に提供し、一方で県民は参加型で収集したデータを提供するなど、双方向でデータを共有し、やりとりをする仕組みを構築して、ポテンシャルを把握・検証する仕組みを作してほしい。資料はよくまとめられているが、KPIはもっと深く議論していかないと数値目標が達成できないのではないだろうか。地域らしさと生物多様性との結びつきなどを含めて、空間的な数値目標を検討していただきたい。現在は、環境が大きく変化している。気候変動による災害の危険性が高まっているため、防災分野への対応は必須である。グリーンインフラやEco-DRRとの連携が重要になってくるため、その部分を強調してもよいのではないだろうか。また、愛知県は世界のGDPの1%以上を持っているため、生産活動との関わりを説明すべきである。グローバルな視点と、ローカルの生物多様性の取組を結び付けて考えてもよいのではないだろうか。

#### 【委員】

- ・10年後を目指した目標であるが、心配なのは行動計画での多様な主体の部分であり、誰がやるのかが不明瞭である。明確にすることが必要であろう。今のボランティアは皆さん高齢である。10年後に誰が担うかが重要であり、そのためには教育が必要である。ユースは入っているが、今は大学生も高校生も忙しい。担い手となる人材育成は、高齢者に頼らないためにも必要である。愛知県の国土利用計画に指針も出ているが、森林が増えることで生物多様性が高まるのかは不明確である。10年後の計画であるので、具体性を付け加えたい。

**【委員】**

- ・指標の動向には、良くなっているものと悪くなっているものがある。漁獲量についても増減傾向を追記いただきたい。また、あるべき姿が示されているが、それが10年後の姿なのか、もっと先の将来のあるべき姿なのかを示した上で、あるべき姿を実現するためにバックキャストリングすることを示した計画にしたい。

**【委員】**

- ・ワークショップの参加者はどのような方だったのか。

**【事務局】**

- ・生物多様性の保全活動をされている方が多かった。

**【委員】**

- ・もともとの関心がある方の意見としてワークショップの結果が出ているが、活動に具体性を持たせるためには一般県民の意識を把握する必要がある。岡崎市の川では、金魚を放流する取組を長年続けているが、金魚を放流することが良いか悪いかという問題が浸透していない。金魚を放流しているのは川を守る会の方々であり、好意でやっていただいているが、そのような方々に生物多様性の意味が届いているのか疑問に感じている。一般県民に、戦略の意味や活動を届けていくことが重要であるため、しっかり行動計画に含める必要がある。地域ごとの小さいイベントや、リーフレットを作成して学校に届ける取組も必要である。

**【委員】**

- ・生態系ネットワークであるが、海や沿岸部の取組が少ないという印象である。渥美半島での海の取組も重要になってくるのではないだろうか。また、これから危機になる課題もあるのではないかと感じる。太陽光発電や風力発電といった再生エネルギーの開発については、生物多様性の取組とのバッティングがある。何か県としてのメッセージを込めてもよいのではないだろうか。ワークショップの結果や、あいち・なごや宣言などの県民の意見が、骨子のどこで答えているのかを示してほしい。まだ答えきれていない部分もあるのではないだろうか。人材育成については、人がいない中で低コスト低労力で行っていく必要がある。技術開発など、企業活動との連携でうまく実現できれば良いのではないだろうか。

**【委員】**

- ・2050年に向けてバックキャストリングを進めていくことが必要である。愛知県はSDGs未来都市に選出されているが、SDGsの県民への浸透はまだまだな状況であると認識している。

**【委員】**

- ・低炭素や省エネを企業では30年やっている。生物多様性と各分野及び経済・社会とのかかわりイメージでは、それぞれの矢印の先が「自然との共生」となっているが、自然との共生は後から出てきた考えである。主流化は企業でも一番苦勞している点である。企業が頑張っているのは社会貢献についてであるが、自然との共生としてはまだまだ進められていない。うまく指標を作っただけだと、企業としても取り組みやすくなるのではないだろうか。

**【委員】**

- ・農林水産業と生物多様性の関わりでは、最大限協力したいと考える。

**【委員】**

- ・地域循環共生圏の考え方では、環境経済社会の3側面を言及している。都市と地域の循環も必要となるので、戦略には盛り込んでいただきたい。環境省本省では国家戦略改定の研究会も行っているなので、その内容も地域戦略に反映して進めていただきたい。

**【委員】**

- ・生物多様性の認知度であるが、名古屋市でも同様に横ばいであり、上げていく必要があると感じている。身近なところから生物多様性を知っていただくために、消費者や生活者にどのようにアプローチするかと検討している。名古屋市は自然と触れ合う場が少なくなっているが、身近な人を対象とした施策を設けていただきたい。愛知県は生物多様性の保全活動を実践している人が多いようであるので、ポテンシャルは高いと感じている。マッチングは市町村との連携も含めて考えていただきたい。

**【委員】**

- ・最後に重要だと思われることをまとめる。自然共生圏のあるべき姿は2030年と2050年であるはずであり、そこを示す必要がある。NPO等の活動人材についてはいかに教育を進めていくか。中学生や高校生は忙しく、参加してくれるのは小学生や大学生である。これからはリタイアした人を教育していく視点も必要である。企業ごとにOBの活動を促すようなことも戦略には示せるのではないだろうか。

**(5) その他**

**【事務局】**

- ・次回の委員会は8月頃、新あいち戦略素案を提示予定。最後の委員会は年明け頃に開催予定。

以上